

る葉の開きはじめてから、10日余りの間は緑色であって、その後純白になるという特性がある。また花穂は花後たいては側方か下方にまがり、おそらくまで立っているヒトリシズカと異なる。花の大きいことは本種の特徴の一つであるが、雄蕊をその着生する子房の肩から引きはなし、多数のものを測定したが、側枝や発育不良の花などに多少の例外はあるが、大部分10mm以上で最長18mmまであって、記載に符合していることがわかった。私は前回の調査にあたって、花糸の長さだけを測定するという誤ちを犯したことに気づいたので、ここにおわびして訂正します。

4) 葉. ヒトリシズカは葉の表面に光沢があるが、キビヒトリシズカにはない。

5) 茎. 春、地上に芽を出した頃は、キビヒトリシズカはヒトリシズカと同様に、茎や葉柄や葉脈が帶暗紫褐色であるが、次第に淡くなつて、落花後は節と葉柄の茎部を除いて淡緑色となり、ヒトリシズカの帶紫色のままであると著しく異なる。

(長崎県壱岐郡郷の浦町)

○“デジマノキ”について(外山三郎) *Saburô TOYAMA: Agathis alba Foxw.*
cultivated in Japan

長崎の出島は旧幕時代オランダ人を隔離居住させるため、長崎港内に築造された扇形の人工島である。明治になって、その前方が埋立てられて、今は完全に陸続きとなり、昔のおもかげは、ほとんど残っていない。そして現在この旧出島の一角に朝永外科病院があって、その庭先に一本のナンヨウスギ科の *Agathis alba* Foxw. がある。高さおよそ9m、目通り幹囲1.10mで花はつけないが樹勢はよい。この樹の原産地はインド、ジャワ、フィリピンなどである。現在の朝永病院の建物の一部は安政開国後、慶応か明治初年に英国人が建てた数会の一部で、朝永氏の先代が大正12年、英國領事館より購入して転居したものという。朝永氏先代の末亡人の談によれば、この樹は転居当時と余り変わぬ大きさで、旧幕時代オランダ人によってジャワあたりからここに持ちこまれたものといわれていたという。これこそ、日蘭文化史に残る出島の記念樹として貴重な存在である。上原敬二氏の樹木大図説によると、ボイテンゾルグ植物園に径1mのこの樹の並木があって有名、和名はマニラコバールノキという意味が述べてある。また、佐藤正巳氏の書かれたものによると、同じジャワのボゴール植物園に、かっての園長タイスマン氏が、日光の杉並木に模して作ったこの樹の壮大な並木があるという。私は、この樹に新しくデジマノキの名を与えて出島の記念樹の保存を考えたいと思う。種名のご教示をいただいた初島住彦氏に感謝する。(長崎大学学芸学部生物学教室)